

【宋紀一】起上章浞灘，盡昭陽大淵獻，凡四年。

■宋、●魏、▲燕、統国訳漢文大成、經子史部第7卷178pより

高祖武皇帝・永初元年（庚申，420年）

（南朝宋の始祖、劉裕、字は德興、生年・興寧元年3月17日（363年4月16日）没年・永初3年5月21日（422年6月26日））

●春，正月，己亥（14日），魏主は宮に還る。

西秦 秦王の（乞伏）熾磐は其の子の（乞伏）暮末（晉書には慕末、宋書には乞佛茂蔓）を立てて太子と為し、仍りて撫軍大將軍を領し、中外諸軍事を都督せしめ、大赦し、改元して建弘とす。

【劉裕は禪讓を受け宋皇帝に即位】

■[宋王・劉裕の禪讓の要請] 宋王は禪（讓）を受けんと欲し而して發言するに難く、乃ち（宋の）朝臣を集めて宴飲し、從容として言つて曰く

「桓玄は位を篡（奪）し、鼎命は已に移る。我は大義を首唱し、帝室を興復し、南征北伐、四海を平定し、功は成り業は著にして、遂に九錫を荷（に）う。今年は將に衰え暮れんとし、崇きこと極め此くの如く、物は盛滿を忌み、久しく安んず可きに非らず。今爵位を奉還し、京師に歸老せんと欲す。」

群臣は惟だ盛んに功德を稱し、其の意を論る莫し。日は晩れ、坐は散る。（7-179p）中書令の傅亮は外に還り、乃ち悟り、而して宮門は已に閉じ、亮は扉を叩いて見えるを請い、王は即ち開門して之に見える。亮は入り、但だ曰く、

「臣は暫く宜しく都に還る者なり。」

王は其の意を解し、復た他言する無く、真（統は直）に云う、

「幾人を須（もち）いて自ら送るや？」

亮は曰く、

「數十人にして可なり也。」

即時に辭を奉じる。亮は出で、已に夜なり、長星（彗星）の天に竟（わた）るを見、髀（ヒ、地面に垂直に立てた棒、曆觀測用）を拊（う）ちて歎じて曰く、

「我は常に天文を信じず、今は始めて驗なり矣。」

亮は建康に至り、夏，四月，王を征（統は徵）して入り輔けしむ。王は子の義康を留めて都督豫、司、雍、並四州諸軍事、豫州刺史と為し、壽陽（寿春、安徽省淮泗道壽県、現・淮南市寿县）に鎮せしむ。義康は尚ほ幼く、相國參軍の南陽の劉湛を以て長史と為し、府州（都督府と豫州）の事を決せしむ。湛は弱年より即ち物を宰する之情有り、常に自ら管（齊の宰相の管仲）、葛（諸葛亮）に比べ、博は書史に涉り、文章を為（つく）らず、談議を喜ばず、王は甚だ之を重しとす。

●五月，乙酉（2日），魏は更めて宣武帝（魏主・拓跋珪）に諡して道武帝と曰う。

●[封玄之は弟の孤兒の磨奴を助命] 魏の淮南公の司馬國璠（魏に降るは前卷晉安帝義熙13年）、池陽の子の司馬道賜は外に叛かんと謀り、司馬文思は之を告げる。庚戌（15日）、魏主は國璠、道賜を殺し、文思に賜つて鬱林公と爵す。國璠等は平城の豪桀を連引し、坐する族の誅する者は數十人、章安侯の封懿之の子の玄之は坐に當たる。魏主は玄之が燕朝の舊族（慕容廆が昌黎に興り、封氏は代々属す）なるを以て、其の一子を

宥さんと欲す。玄之は曰く、

「弟の子の磨奴は早に孤（児）、其の命を全くすを乞う。」

乃ち玄之の四子を殺して而して磨奴を宥す。

■六月，壬戌（9日），王は建康に至る。傅亮は晉の恭帝に宋に禪位を諷し，詔草を具さにして帝に呈して，之を書か使む。帝は欣然として筆を操り，左右に謂って曰く、

「桓玄之時に，晉氏は已に天下無く，重ねて劉公の延べる所と為るは，將に二十載（晉安帝の元興三年に劉裕は桓玄を討つ、凡そ17年）にならんとす。今日之事は，本より甘心する所なり。」

遂に赤紙に書いて詔を為る。（晉の武帝が泰始元年に禪讓を受け、建康四年に長安陥落まで52年。元帝が建康で即位し今年まで103年、通算157年）

■[宋の劉裕即位] 甲子（11日），帝は琅邪の第に遜り，百官は拜辭し，秘書監の徐廣は流涕して哀慟す。丁卯（14日），王は南郊に壇を為して，皇帝に即位す。禮畢わり，石頭より法駕を備えて建康宮に入る。徐廣は又た悲感し流涕し，侍中の謝晦は之に謂って曰く、

「徐公は小しく過ぎる無きを得るや！」（哀憤悲感するが過度ではないか）

廣は曰く、

「君は宋朝の佐命為り，身は是れ晉室の遺老なり，悲觀之事は，固より同じくす可からず。」

廣は，邈（晉の孝武帝に重用される）之弟也。帝は太極殿に臨み，大赦し，改元す。其の鄉論清議を犯すもの（蓋し罪を名教に得る者）は，一に皆な蕩滌（洗い流し清める）し，之と與に更に始める。

★裴子野は論じて曰く、昔重華（帝舜）の終わりを受け，四凶（共工、驩兜、三苗、鯀）は流れ放つ。（7-180p）
（周の）武王は殷に克ち，頑民は洛に遷さる。天下之惡は一也，鄉論清議は，之を除くは，過まてり矣！

■[晉の恭帝を零陵王] 晉の恭帝を奉じて零陵王と為し，優崇之禮は，皆な晉初の故事に仿（模倣）い，宮は故の秣陵縣（江蘇省金陵道江寧縣、南京市江寧区）に即き，冠軍將軍の劉遵考をして兵を將いて防衛せ使む。褚后を降して王妃と為す。皇考を追尊して孝穆皇帝と為し，皇妣趙氏を孝穆皇后と為す。王太后の蕭氏（帝の父翹は趙氏を娶り帝を生みて殂し、蕭氏が繼ぐ）を尊びて皇太后と為す。上は蕭太后に事えること素より謹む。位に即くに及びて、春秋已に高けれど、且毎に入りて太后に朝すること、未だ嘗て時刻を失わず。詔す、
「晉氏の封爵は、當に運に随いて改めるべし」

獨り始興・廬陵・始安・長沙・康樂の五公を置き、爵を降して縣公及び縣侯と為し、以て王導・謝安・溫嶠・陶侃・謝玄の祀りを奉ず。その力を義熙に宣べ、艱難を同じくするに豫かりし者は、一に本秩に仍る。
（下線部分欠、續にて補充）

■庚午（17日），司空の道憐を以て太尉と為し，長沙王に封じる。司徒の道規を追封して臨川王と為し，道憐の子の義慶を以て其の爵を襲わしむ。其の餘の功臣の徐羨之等は，位を増し爵を進めるに各々差有り。

■[劉裕は劉穆之の才能を惜しむ] 劉穆之を追封して南康郡公と為し，王鎮惡を龍陽縣侯と為す。上は毎に穆之を歎念して，曰く、

「穆之死なずんば，當に我を助けて天下を治むべし。『人之雲に亡びる（詩の瞻印の篇の辭），邦國の殄瘁（尽き疲れる）す』謂う可きかな！」

又た曰く、

「穆之は死し、人は我を輕易（軽んじる）す。」

■皇子の桂陽公の**義真**を立てて廬陵王と為し、彭城公の**義隆**を宜都王と為し、**義康**を彭城王と為す。

■己卯（26日）、改めて《泰始歷》を《永初歷》（元号にならう）と為す。

●**魏主**は翳憤山（平城の西、五原の東）に如き、遂に馮（統は渦）**湍池**（五原の鹽池）に至る。**上**（劉裕）の禪を受ける聞き、驛をもて**崔浩**を召して之に告げて曰く、

「卿の往年之言（前卷晉安帝義熙14年）は驗なる矣、朕は今日に於いて始めて天道を信じる。」

●**秋**、**七月**、丁酉（15日）、**魏主**は五原に如く。

■**西涼**甲辰（22日）、詔して涼公の**歆**を以て都督高昌等七郡諸軍事、征西將軍、酒泉公と為す。秦王の**熾磐**を安西大將軍と為す。

■交州刺史の**杜慧度**は林邑を撃ち、大いに之を破り、殺す所は過半。林邑は降を乞い、前後鈔掠する所と為る者は皆な遣りて還す。**慧度**は交州に在りて、政を為すに纖密にして、一に家を治める如く、吏民は畏れ而して之を愛し、城門は夜開き、道に遺（失物）を拾わず。

●丁未（25日）、**魏主**は雲中に如く。

北涼 **〔北涼・河西王・蒙遜と西涼・歆の対立〕** 河西王の**蒙遜**は（西）涼を伐たんと欲し、先ず兵を引いて秦の**浩璽**を伐つ。既に至り、師を潜めて還りて川巖に屯す。（7-181p）

西涼 **〔西涼・歆の太后尹氏の忠告〕** 涼公の**歆**は虚に乗りて張掖を襲わんと欲す。**宋繇**、**張體順**は切に諫めるも、聽かず。太后の**尹氏**は**歆**に謂って曰く：

「汝は新造之國。地は狭く民は希^{まれ}にして、自ら守りて猶ほ懼れ足らず、何の人を伐つに暇あるか！先王は臨終にて、殷勤として汝を戒める。深く慎しみて用兵し、境を保ち民を寧んじ、以て天の時を俟つべし。言は猶ほ耳に在り、奈何して之を棄てるや！**蒙遜**は善く兵を用い、汝之敵に非らず、數年以來、常に兼併之志有り。汝の國は小なりと雖も、善政を為すに足り、徳を修め民を養い、靜かに以て之を待て。彼は若し昏暴ならば、民は將に汝に歸せんとす。若し其の休明ならば、汝は將に之に事^{ちか}えんとす。豈に輕々しく舉動を為し、非望を僥冀するを得んや！吾を以て之を觀るに、但だ師を喪うに非らず、殆んど將に國を亡ぼすや！」

亦た聽かず。**宋繇**は歎じて曰く、

「今茲^{ことごと}は大事は去るかな矣！」

西涼 **〔西涼・歆の酒泉出撃〕** **歆**は步騎三萬を將して東に出る。**蒙遜**は之を聞き、曰く、

「**歆**は已に吾が術中に入らんと欲し、然れど吾の師が旋^{かえ}すを聞けば、必ず敢えて前まず。」

乃ち西境に露布（檄を飛ばして宣言）し、雲わく

「已に浩璽に克ち、將に黃谷（甘肅省西寧道碾伯県、現・海東市樂都区、南涼の都）に進攻せんとす。」

歆は之を聞き、喜び、進みて都瀆澗（甘肅省甘涼道内）に入り、**蒙遜**は兵を引いて之を撃ち、懷城に戦い、**歆**は大敗す。或は**歆**に還りて酒泉を保つを勧め、**歆**は曰く、

「吾は老母之言に違え以て敗を取る、此の胡を殺さずして、何の面目あつてか復た我が母を見んや！」

遂に兵を勅して蓼泉に戦い、**蒙遜**は殺す所と為る。（安帝の隆安四年に李暠が敦煌に立ち、凡そ二主21年）**歆**の弟の酒泉太守の**翻**、新城太守の**預**は、羽林右監の**密**、左將軍の**眺**、右將軍の**亮**を領して西に敦煌に奔る。

北涼 **〔北涼・蒙遜の酒泉占領〕** **蒙遜**は酒泉に入り、侵掠を禁じ、土民は安堵す。**宋繇**を以て吏部郎中と為し、之に選舉を委ねる。涼之舊臣の才望有る者は、鹹な禮し而して之を用いる。其の子の**牧犍**を以て灑泉

太守と為す。敦煌太守の**李恂**は、**翻**之弟也、**翻**等と敦煌を棄てて北山に奔る。**蒙遜**は**索嗣**（111 卷晉安帝隆安四年に死亡）之の子の**元緒**を以て敦煌太守を行わしむ。

蒙遜は姑臧に還り、涼の太后の**尹氏**に見みえ而して之を勞り、**尹氏**は曰く、

「**李氏**は胡（**蒙遜**は張掖の盧水胡）の滅ぼす所と為り、復た何を言うか知るや！」

或は**尹氏**に謂って曰く、

「今母子之命は人の掌握に在り、奈何して之を傲らんや！且つ國は亡び子は死したるに、曾て憂色無しは、何ぞ也？」

尹氏は曰く、

「存亡死生は、皆な天命有り、奈何して更に凡人の如く、兒女子之悲を為さん乎！吾は老婦人にして、國亡び家破るとも、豈に復た餘生を惜しみ、人臣の**妝**（しやう（続は妾）と為る可けん乎！惟だ速かに死すを幸と為す耳。」

蒙遜は嘉よみして而して之を赦し、其の女を娶つて**牧犍**の婦と為す。

■**八月**，辛未（19日），妃の**臧氏**に追諡して**敬皇后**と為す。癸酉（21日），王の太子の**義符**を立てて皇太子と為す。

■**閏月（九月、元嘉曆）**，壬午（1日），詔して晉帝の諸陵は悉く守衛を署せしむ。

西秦**九月（十月、元嘉曆）**，秦の振武將軍の**王基**等は河西王の**蒙遜**の胡園の戍を襲い、二千餘人を俘として而して還る。（7-182p）

西涼「**西涼・李恂は敦煌に自立**」**李恂**は敦煌に在りて惠政在り。**索元緒**は粗險にして殺を好み、大きく人の和を失う。郡人の**宋承**、**張弘**は密信（密使）して**恂**を招く。冬、**恂**は數十騎を帥いて敦煌に入り、**元緒**は東に涼興（甘肅省安肅道安西県、現・酒泉市瓜州県）に奔る。**承**等は**恂**を推して冠軍將軍、涼州刺史と為し、改元して永建とす。河西王の**蒙遜**は世子の**政德**を遣わして敦煌を攻めしめ、**恂**は城を閉じて戦わず。

■**十二月（十二月閏月、元嘉曆）**，丁亥（7日），杏城の羌酋の**狄温子**は三千餘家を帥いて（夏に背き）魏に降る。

●是の歲，魏の**姚夫人**（魏に嫁ぐは117 卷晉安帝義熙十年）は卒し、追諡して**昭哀皇后**とす。

高祖武皇帝・永初二年（辛酉，421年）

■**春，正月**，辛酉（12日），上は南郊に祀し、大赦す。

■**裴子野**は論じて曰く、

「夫れ天地を郊祀するは、歲事を修める也。彼の罪有るを赦し、夫れ何の為なる哉！」

■揚州刺史の廬陵王の**義真**を以て司徒と為し、尚書僕射の**徐羨之**を尚書令、揚州刺史と為し、中書令の**傅亮**は尚書僕射と為す。

●辛未（22日），魏主の（拓跋）**嗣**は行きて公陽に如く。

北涼河西王の**蒙遜**は衆二萬を帥いて敦煌に**李恂**を攻める。

西秦秦王の**熾磐**は征北將軍の**木弈干**、輔國將軍の**元基**を遣わして**上邽**を攻めしめ、霖雨に遇い而して還る。

●**三月**，甲子（16日），魏の陽平王の**熙**は卒す。

●**魏主**は代都の六千人を發して苑を築き、東は白登を包み、週（続は周）は三十餘里。

【蒙遜は西域を統一】

北涼 **〔河西王・北涼の蒙遜は西域を統一〕** 河西王の蒙遜は壅水に築堤して以て敦煌を灌ぐ。李恂は降を乞い、許さず。恂は宋承等を將して城を擧げて降る。恂は自殺す。蒙遜は其の城を屠り、恂の弟の子の寶を獲り、姑臧に囚える。是に於いて西域の諸國は皆な蒙遜に詣り臣を稱して朝貢す。

■夏、四月、己卯（1日）朔、詔して所在の淫祠の蔣子文より以下皆な之を除かしむ。其の先賢及び勲德を以て祠を立てる者は、此の例に在らず。

西秦 吐谷渾王の阿柴は遣使して秦に降り、秦王の熾磐は阿柴を以て征西大將軍、開府儀同三司、安州（西秦は吐谷渾に置く）牧、白蘭王と為す。

●六月、乙酉（8日）、魏主は北巡して蟠羊山（參合陂の東、山西省雁門道陽高県、現・大同市陽高県）に至る。秋、七月、西巡して河に至る。

北涼 河西王の蒙遜は右衛將軍の沮渠鄯善、建節將軍の沮渠苟生を遣わして衆七千を帥いて秦を伐たしむ。秦王の熾磐は征北將軍の木奔乾等を遣わして歩騎五千を帥いて之を拒ましめ、鄯善等を五澗（川、甘肅省甘涼道武威県、現・武威市）にて敗り、苟生を、虜とし斬首は二千而して還る。

■**〔前晋帝・零陵王の誅殺〕** 初め、帝は毒酒一甕（続は壺）を以て前の琅邪の郎中令の張偉に授け、零陵王（前晋帝）に鳩（続は酖）せ使め、偉は歎じて曰く、（7-183p）

「君を鳩し以て生を求め、死するに如かず！」

乃ち道に於いて自ら飲んで而して卒す。偉は、邵之兄（続は子）也。太常の褚秀之、侍中の褚淡之、皆な王之妃の兄也。王が男を生む毎に、帝は輒ち秀之の兄弟をして方便（ばれない方策）して之を殺さ令む。王は自ら遜位し、深く禍の及びばんことを慮りて、褚妃と共に一室に處し、自ら食を床（続は牀）前に煮、飲食の資する所、皆な褚妃に出で、故に宋人は其の隙を伺うを得る莫かれ。九月、帝は淡之をして兄の右衛將軍の叔度と妃を視るに往か令め、妃は出でて別室に就きて相い見る。兵人は垣を逾えて而して入り、王に藥を進める。王は飲むを肯ぜず、曰く、

「佛教では、自殺する者は復た人の身を得ず（人に生まれ変われない）。」

兵人は被を以て之を掩い殺す。帝は百官を帥いて朝堂に臨（哭す）むこと三日。

●庚戌（5日）、魏主は宮に還る。

■冬、十月、己亥（25日）、詔して河西王の蒙遜を以て鎮軍大將軍、開府儀同三司、涼州刺史と為す。

●己亥（25日）、魏主は代に如く。

■十一月、辛亥（7日）、晋の恭帝を沖平陵に葬し、帝は百官を帥いて瞻（せん、仰ぎみる）送す。

●十二月、丙申（22日）、魏主は西巡し、雲中に至る。

西秦 秦王の熾磐は征西將軍の孔子等を遣わして騎二萬を帥いて契汗禿真を羅種（青海の東方）に撃たしむ。

北涼 河西王の蒙遜の署する所の晋昌太守の唐契は郡に據りて叛し、蒙遜は世子の政德を遣わして之を討たしむ。契は、瑤（唐瑤、111 卷晋の安帝隆安四年）之子也。

■上之宋公と為る也、謝瞻は宋台（彭城に立つ）の中書侍郎と為り、其の弟の晦は右衛將軍と為る。時に晦は權に遇うこと已に重く、彭城より都に還りて家を迎え、賓客は輻湊し、門巷は填咽す。瞻は家に在り、驚駭し、晦に謂って曰く、

「汝の名位は未だ多からず、而して人歸は趣くこと乃ち爾り！吾が家は素より恬退（しんたい、穏やかで争わず）を以て業と為し、時事に幹豫（かんよ、関与）するを願わず、交遊は親朋に過ぎず。而るに汝は遂に勢いは朝野を傾く、此れ豈に門戸之福なる邪！」

乃ち籬を以て門庭を隔てて曰く、

「吾は此くを見るに忍びず。」

ち彭城に還るに及びて、**宋公**に言って曰く、

「臣は本より素士にして、父祖の位は二千石に過ぎず。弟は年は始めて三十、志用は凡近なるに、台府に榮冠し、位任は顯密にす。福は過ぎれば災は生まれ、其の應は遠きこと無し；特に乞い降黜せられ、以て衰門を保たん。」

前後には屢々之を陳ず。**晦**は或るひは朝廷の密事を以て**瞻**に語り、**瞻**は故に親しく舊に向かい説を陳じ、用いて戲笑と為し、以て其の言を絶つ。上の即位に及び、**晦**は佐命の功を以て、位任じ益々重く、**瞻**は愈々憂懼す。是の歳、**瞻**は豫章太守と為り、病に遇いて療せず。臨終するに、(7-184p) **晦**に書を遣りて曰く、

「吾は體をひら啓きて（論語泰伯篇に、曾子室り門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩にいわく、戦々恐々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。今にして後、吾は免かるるを知るかな、小子と。）幸いに全くすを得る、亦た何をか恨む所あらん！弟は思い自ら勉勵し、國の為にし家の為にせよ。」

高祖武皇帝・永初三年（壬戌，422年）

●**春，正月**，甲辰（1日）朔，**魏主**は雲中より西巡し、屋寶城（薛林山の東。綏遠特別区域歸綏県内、フフホト市玉泉区）に至る。

■**〔徐羨之を司空、録尚書事〕**癸丑（10日），**徐羨之**（桓脩の撫軍中央參軍として帝と府の同僚、親結し義兵を共にす）を以て司空、録尚書事と為し、刺史は故の如し。江州刺史の**王弘**を衛將軍、開府儀同三司と為す。中領軍の**謝晦**を領軍將軍兼散騎常侍と為し、入りて殿省に直し、宿衛を總統せしむ。**徐羨之**は布衣（着の身着のまま）より起こり、又た學術無く、直に志力の局度を以てす。一旦廓廟に居るや、朝野は服を推し、鹹な宰臣之望有るを謂う。沈密に言寡く、憂喜を以て色に見せず。頗る弈棋にたく工みなれども、戲を觀るに常に未だ解せざるが若く、當世は倍々此れを以て之を推す。**傅亮**、**蔡廓**は常に言う、

「**徐公**は萬事をさと曉り、異同を安ず。」

嘗て**傅亮**と、**謝晦**とは宴に聚まり、**亮**、**晦**の才學博く辯じ、**羨之**は風度詳整、時にして然る後に言う。**鄭鮮之**は歎じて曰く、

「**徐**、**傅**の言論を觀れば、復た學問を以て長と為さず。」

■**西秦**秦の征西將軍の**孔子**等は大いに**契汗禿真**を破り、男女二萬口、牛羊五十餘萬頭を獲る。**禿真**は騎數千を帥いて西走し、其の別部の**樹奚**は戸五千を帥いて秦に降る。

■**二月**，丁丑（4日），詔して豫州（義熙九年に揚州の大江以西・大雷以北を割きて置く）の淮以東を分けて南豫州と為し（淮西は北豫州、汝南に治す）、**歷陽**（安徽省安慶道和県、現・馬鞍山市和県、揚子江の北岸）に治し、彭城王の**義康**を以て刺史と為す。又た荊州十郡を分けて湘州（晉の安帝は義熙13年に省く）を置き、**臨湘**（湖南省湘江道長沙県の南、現・岳陽市臨湘市）に治し、左衛將軍の**張邵**を以て刺史と為す。

●丙戌（13日），**魏主**は宮に還る。

【劉裕の死と北魏南下】

■**〔劉裕の病〕****三月**，上は不豫（病氣）なり、太尉の長沙王の**道憐**、司空の**徐羨之**、尚書僕射の**傅亮**、領軍

將軍の**謝晦**、護軍將軍の**檀道濟**は並びて入りて醫藥を侍す。群臣は神祇の祈禱を請い、上は許さず、唯だ侍中の**謝方明**をして以て疾を宗廟に告げ使めて而して已む。上の性は奇怪を信ぜず、微なりし時に符瑞多く、貴きに及び、史官は審かにするに聞く所を以てし、上は拒みて而して答えず。

■**檀道濟**は出でて鎮北將軍、南兖州（晉の成帝が立て京口に治す。）刺史と為り、廣陵（江蘇省淮揚道江都県の東北、現・揚州市江都区）に鎮し、悉く淮南の諸軍を監す。

■**〔皇太子の才非ず〕**皇太子は多く群小に狎^なれ、**謝晦**は上に言つて曰く、「陛下の春秋は既に高く、宜しく萬世の存するを思うべし、神器は至重なり、才非ざるに負荷せ使む可からず。」

上は曰く、（7-185p）

「**廬陵**は何如や？」

晦は曰く、

「臣は焉^{これ}を觀るを請う。」

出でて廬陵王の**義真**に造^{いた}り、**義真**は盛んに與に談ぜんと欲し、**晦**は甚だ答えず。還りて曰く、「德は才よりも輕し、人主に非らざる也。」

丁未（5日）、**義真**を出して都督南豫、豫、雍、司、秦、並六州諸軍事、車騎將軍、開府儀同三司、南豫州刺史と為す。是より後、大州の率は都督を加え、多くの者は或は五十州（誇張す。宋末でも22州、梁武帝で50州）に至り、復た詳しく載す可からず矣。

■帝の疾は瘳^いえ、己未（17日）、大赦す。

■秦、雍の流民は南に梁州に入る；庚申（18日）、遣使して絹萬匹を送り、且つ荊、雍之谷を漕（水上輸送）して以て之を賑わす。

■**刁逵**^{ちょうき}（京口の大地主、404年殺害、113卷晉安帝元興三年）之誅さるる也、其の子の**彌**は亡命す。辛酉（19日）、**彌**は數十人を帥いて京口城に入り、太尉留府（長沙王道憐は帝位で京口に鎮し、入りて医藥に侍し留府あり）司馬の**陸仲元**は撃ちて之を斬る。

●乙丑（23日）、魏の河南王の**曜**は卒す。

●夏、四月、甲戌（2日）、魏は皇子の**燾**を立てて太平王と為し、相國を拜し、大將軍を加える；**丕**を樂平王と為し、**彌**を安定王と為し、**范**を樂安王と為し、**健**を永昌王と為し、**崇**在建寧王と為し、**俊**を新興王と為す。

■乙亥（3日）、詔して仇池公の**楊盛**を封じて武都王と為す。

西晉秦王の**熾磐**は折衝將軍の**乞伏是辰**を以て西胡校尉と為す。列渾城を汧羅（青海の東、羅川）に築き以て之に鎮す。

■**〔劉裕の遺言、謝晦を頼るべし、殂す〕**五月、帝の疾は甚しく、太子を召して之を誡めて曰く、

「**檀道濟**は干略有ると雖も、而して遠志無く、兄の**韶**の如く御し難き之氣有るに非らず也。**徐羨之**、**傅亮**、當に異圖無し。**謝晦**は數々征伐に従い、頗る機變を識り、若し同異（元々劉裕は謝晦を信用していない）有れば、必ず此の人也。」

又た手ずから詔を^{つづ}りて曰く、

「後世若し幼主有れば、朝事は一に宰相に委ね、母后は朝を臨むを煩わさざるべからず。」（外戚排除か）

司寇の**徐羨之**、中書令の**傅亮**、領軍將軍の**謝晦**、鎮北將軍の**檀道濟**は同じく顧命を被る。癸亥（21日）、

帝は西殿に於いて殂す。(年 60、この後南北朝の君主没を殂と称す)

■ **〔劉裕の性格実情〕** 帝は清簡にして慾は寡く、嚴整にして法度有り、被服居處は、布素（無官の者）よりも儉なり、游宴は甚だ稀れにして、嬪御は至って少なし。嘗て後秦の**高祖**（姚興）の從女を得、盛んに寵有り、頗る以て事を廢する。**謝晦**は微かに諫め、即時に遣り出す。財帛は皆な外府に在り、内に私藏無し。嶺南は嘗て入筒の細布、一端は八丈を獻じ、帝は其の精麗が人を勞するを惡み、即ち有司に付して太守を彈（彈劾）ぜしめ、布を以て之に還し、並せて嶺南に制して此の布を作るを禁じる。公主は出でて適くに、遣送するは二十萬（錢）に過ぎず、錦繡之物無し。内外の奉禁は、敢えて侈靡（しび）を為す莫し。

■ **太子は皇帝に即位し、** 年は十七、**（7-186p）** 大赦し、**皇太后**を尊して**太皇太后**と曰い、妃の**司馬氏**を立てて皇后と為す。后は、晉の**恭帝**の女の**海鹽公主**也。

● **〔魏主の性格〕** 魏主は寒食散を服し、頻年（ひんねん）に藥は發し、災異は屢々見られ、頗る自ら以て憂う。中使を遣わして密かに白馬公の**崔浩**に問いて曰く、

「屬者（ちかごろ）は日は趙、代之分に食す。朕は疾して彌年（年を渡る、一年余）にして愈えず、恐れるは一旦不諱（死ぬ）ならば、諸子は並んで少く、將に之を若何せんや？其の我が為に身後之計を思え。」

浩は曰く、

「陛下の春秋は富み盛んにして、行々平愈に就かん。必ず已むを得ずんば、請う誓言を陳べん。聖代龍興してより、儲貳を崇ばず、是れを以て永興之始め（115 卷晉の安帝義熙五年）は、社稷（ほん）は幾ど危うし。今宜しく早く東宮を建つべし。賢き公卿を選び以て師傅と為し、左右の信臣は以て賓友と為す。入りて萬機を總し、出でて戎政を撫でしめるべし。此くの如くすれば、則ち陛下は以て優遊して為す無く、神を頤（やしな）（おとがい、減らず口）い壽を養う可し。萬歳之後。國に成主有り、民は歸する所有りて、奸宄望みを息め、禍いは自ら生じる無し矣。皇子の**燾**は年將に周星（12 オ一周）なり、明睿にして溫和、子を立てるに長を以てすれば、禮之大經なり、若し必ず成人を待ち然る後に之を擇び、天倫（えら）を倒錯（長を廢し幼を立てる事）するは、則ち亂を召く之道也。」

魏主は復た以て南平公の**長孫嵩**に問う。對えて曰く、

「長を立てるは則ち順、賢を置けば則ち人は服す。**燾**は長にして且つ賢、天の命ずる所也。」

帝は之に従い、太平王の**燾**を立てて皇太子と為し、之をして正殿に居り朝に臨ませ、國の副主と為す。

長孫嵩（358-437、本貫代郡）及び山陽公の**奚斤**、北新公の**安同**を以て左輔と為し、東廂に坐し、西面す。**崔浩**は太尉の**穆觀**、散騎常侍の代人の**丘堆**と右弼と為し、西廂に坐して、東面す。百官は己を總べて以て焉をかしむ。帝は西宮に避けて居り、時に隠れて而して之を窺い、其の決斷を聴き、大いに悦び、會々（たまたま）侍臣に謂って曰く、

「**嵩**は宿德の舊臣、四世（昭武帝・道武帝・明元帝・太子燾）に歷事し、功は社稷を存す。**斤**は辯は捷ち智謀あり、名は遐邇（遠近）に聞く。**同**は俗情を曉解し、事に於いて明練する。**觀**は政要に達し、吾が旨趣を識る。**浩**は博聞で強識にして、天人を精察す。**堆**は大用無しと雖も、然るに公に在りて専ら謹む。此の六人を以て太子を相い輔ければ、吾は汝が曹（ともがら）と四境を巡行し、叛を伐ちて柔服し、以て志を天下に得るに足る矣。」

● **〔北魏の姓は複雑、簡略化〕** **嵩**の實姓は**拔拔**（ぼつぼつ）、**斤**の姓は**達奚**、**觀**の姓は**丘穆陵**、**堆**の姓は**丘敦**なり。是の時、魏之群臣は代北より出る者は、姓は重複多く、**高祖**の洛に遷るに及び、始めて皆な之を改める。舊史は其の煩雜に知り難きを患（続は惡）い、故に皆な後の姓に従いて以て簡易に就く、今は之に従う。

● **〔魏の政治体制〕** 魏主は又た典東西部の**劉絜**、門下奏事の代人の**古弼**、直郎徒河（拓跋は慕洋や段と同じ鮮卑

で、強盛になり東種を徒河という)の**盧魯元**が忠謹恭(続は公)勤なるを以て、之を東宮に給侍し、分かちて機要を典つかさどり、辭令を宣納せ使む。(7-187p)太子は聰明にして、大度有り。群臣は時に疑う所を奏し、帝は曰く、

「此くは私の知る所に非らず、當に之を汝が曹の國主に決すべき也。」

■**六月**，壬申（1日），尚書僕射の**傅亮**を以て中書監、尚書令と為し、領軍將軍の**謝晦**を以て領中書令と為し、侍中の**謝方明**を以て丹陽尹と為す。**方明**は善く郡を治め、至る所能く名有り。前人に承代し、其の政を易かえず、必ず宜く改める者は、則ち漸を以て移り變わり、跡の尋ねる可き無から使む。

■戊子（17日），長沙景王の**道憐**は卒す。

●魏の建義將軍の**刁雍**ちょうようは青州を寇し、州兵は撃ちて之を破る。**雍**は散卒を収める。走りて大郷山（山東省濟寧道鉅野県、現・荷沢市巨野県）を保つ。

■**秋**，**七月**，己酉（8日），**武皇帝**を初寧陵（江蘇省金陵道江寧県蔣山、現・南京市江寧区）に葬し、廟號は**高祖**とす。

北涼河西王の**蒙遜**は前將軍の**沮渠成都**を遣わして衆一萬を帥いて、兵を嶺南（洪池嶺の南）に耀し、遂に五澗に屯す。**西晉****九月**，秦王の**熾磐**は征北將軍の**出連虔**等騎六千を遣わして之を撃つ。

●**〔高祖の喪に乘る出兵を諫める〕**初め、**魏主**は**高祖**の長安に克つ（劉裕が長安を落す、前卷晉安帝義熙13年）を聞き、大いに懼れ、遣使して和を請い、是れより毎歲交聘して絶えず。**高祖**の殂すに及び、殿中將軍の**沈范**等は奉使して魏に在り、還り、河に及び、**魏主**は人を遣わして追いて之を執らしめ、兵を發して洛陽、虎牢、滑台を取らんを議す。**崔浩**は諫めて曰く、

「陛下は**劉裕**くつぎの歎起(急に起こる)を以てせずして、其の使貢を納め、**裕**は亦た陛下に敬事す。不幸にして今死し、喪に乗りて遽にわかに之を伐つは、之を得ると雖も、美と為すに足らず。且つ國家は今日亦た未だ一舉に江南を取る能わざらん也、而るに徒らに喪を伐つ之名有れば、竊かに陛下の為に取らず。臣は謂う宜しく人を遣わして祭を弔い、其の孤弱とすけを存い、其の凶災あわれを恤み、義聲を天下に佈(続は布)せ使めれば、則ち江南は攻めずして自ら服せん矣。況んや**裕**の新たに死し、黨與は未だ離れず、兵は其の境に臨み、必ず相い帥いて戦を拒み、功は必らず可からず。之を緩くするに如かず、其の強臣の權を争うを待てば、變難は必らず起き、然る後に將に命じて帥を出せば、兵を以て疲勞せず、坐して淮北を収む可けん也。」

魏主は曰く、

「**劉裕**は**姚興**之死（117 卷晉安帝義熙12年、前卷13年）に乗り而して之を滅す、今我は**裕**の喪に乗り而して之を伐つ、何の可からずと為すや！」

浩は曰く、

「然らず。**姚興**の死するや、諸子は交り争い、故に**裕**はきん**冨**(続は冨の下が且の字、隙間)に乗り之を伐つ。今江南には冨無し、比ぶ可からざる也。」

魏主は従わず、司空の**奚斤**に節を假し、晉兵（宋兵・吳兵・鄭兵・楚兵など魏が置く將軍号）大將軍、行揚州刺史を加え、宋兵將軍、交州刺史の**周幾**、吳兵將軍、廣州刺史の**公孫表**を督さ使めて同じく入寇す。(7-188p)

●乙巳（5日），**魏主**は灋南宮（山西省桑乾河の南の宮殿）に如き、遂に廣寧(続は寧、直隸省口北道宣化県 or 涿鹿県、現・張家口市宣化県 or 涿鹿県)に如く。

●辛亥（11日），魏人は平城の外郭を築く、周圍は三十二里なり。

● **「城を攻めるか否かの議論」** 魏主は喬山（直隸省口北道涿鹿県、現・張家口市涿鹿県）に如き、遂に東は幽州に如く。**冬，十月**，甲戌（5日），宮に還る。魏軍は將に發せんとし，公卿は監國之前に於いて集議し，先に城を攻めると先に地を略すを以てす。奚斤は先ず城を攻めんと欲し，崔浩は曰く、

「南人は城を守るに長ぜり，昔苻氏（苻堅）は襄陽を攻めて（104 卷晉孝武帝太元二年四年），年を経て抜かず。今大兵を以て坐して小城を攻め，若し時に克たざれば，軍勢は挫け傷つき，敵は徐に^{おもむろ}に厳し而して來たるを得ん，我は怠って彼は鋭くす，此くは危き道也。軍を分けて地を略し，淮に至りて限りと為し，列して守宰を置き，租穀を^{しゅうれん}収斂すに如かず，則ち洛陽、滑台、虎牢は更に軍の北に在り，南の救いには絶望し，必ず河に沿いて東走す。不らずんば則ち^し圍（^{ゆう}圍、見識が狭い）中之物と為らん、何を其の獲らざるを憂えん也！」公孫表は固く城を攻めるを請い，魏主は之に従う。是に於いて奚斤等は步騎二萬を帥いて，河を濟り，滑台之東に營す。

● 時に司州刺史の毛德祖は虎牢に戍し，東郡太守の王景度（東郡太守、滑台に治す）は德祖に急を告げ，德祖は司馬の翟廣等を遣わして步騎三千を將して之を救わしむ。

● **「司馬楚之の降伏と魏の陳留占領」** 是より先，司馬楚之は衆を聚めて陳留之境に在り，魏兵が河を濟ると聞き，遣使して迎え降る。魏は楚之を以て征南將軍、荊州刺史と為し，（宋の）北境を侵擾せしむ。德祖は長社令の王法政を遣わして五百人を將して邵陵（河南省開封道鄆城縣、現・漯河市召陵区）に戍せしめ，將軍の劉憐をして二百騎を將して雍丘に戍せしめ以て之に備える。楚之は兵を引いて憐を襲い，克たず。^{たまたま}會々台は軍資を送り，憐は出でて之を迎え，^{さんそう}酸棗（陳留郡に属す縣、河南省河北道延津縣、現・新郷市延津縣、開封？）民の王玉は馳せて以て魏に告げる。丁酉（28日），魏の尚書の滑稽は兵を引いて倉垣（^{ひょうよく}城名、陳留郡浚儀縣、河南省開封道開封縣、現・開封市祥符区）を襲い，兵吏は悉く城を逾えて走り，陳留太守の馮翊（^{ひょうよく}三国晉の郡、陝西省西安から渭南）の嚴稜は斤に詣りて降る。魏は王玉を以て陳留太守と為し，兵を給して倉垣を守らしむ。

● 奚斤等は滑台を攻め，抜かず，兵を益すを求める。魏主は怒り，之を切責する。壬辰（23日？），自ら諸國の兵五萬餘人を將して南に天關に出，恆嶺を逾え，斤等の聲援と為す。

西秦 秦の出連度は河西の沮渠成都（五澗に屯す）と戦い，之を禽とす。

● **「魏の滑台占領」** **十一月**，魏の太子の燾は兵を將いて出でて塞上に屯し，安定の王彌をして安同（^{続は}人名としていない、安同はソグド商人かも）と居て守らしむ。庚戌（13日），奚斤等は急に滑台を攻め，之を抜く。王景度は出でて走る。景度の司馬の陽瓚は魏の執る所と為り，降らずして而して死す。魏主は成皋侯の荀兒を以て兗州刺史と為し，滑台に鎮せしむ。

● **「魏の一斉攻撃」** 斤等は進みて土樓（虎牢の東、河南省開封道汜水縣、現・鄭州市滎陽市汜水鎮）に翟廣等を撃ち，之を破り，勝ちに乗り進みて虎牢に逼る。毛德祖は與に戦い，^{しばしば}屢々之を破る。（7-189p）魏主は別に黑契將軍の於（^{続は于}）栗磾を遣わして三千人を將して河陽に屯せしめ，金墉（洛陽）を取らんと謀り，德祖は振威將軍の竇晃等を遣わして河に縁いて之を拒ましむ。**十二月**，丙戌（18日），魏主は冀州に至り，楚兵將軍、徐州刺史の叔孫建を遣わして兵を將いて平原より河を濟り，青、兗を^{とな}徇えしむ。豫州（宋代は汝南・新蔡・譙・梁・陳・南頓・潁川・汝陽・汝陰・陳留郡を領す）刺史の劉粹は治中の高道瑾を遣わして步騎五百を將して項城に據らしめ，徐州（^沛沛城・沛・下邳・蘭陵・東海・東莞・東安・琅邪・淮陽・陽平・濟陰・北濟陰・鐘離・馬頭郡など）刺史の王仲德は兵を將いて湖陸（山東省濟寧道魚臺縣、現・濟寧市魚台縣）に屯す。於栗磾は河を濟り，奚斤と力を並せて竇晃等を攻めて，之を破る。

● **「兗州・青州の平定」** 魏主は中領軍の代人の娥清、期思侯の柔然の閭大肥を遣わして兵七千人を將して周幾に會し，叔孫建は南に河を渡り，碯磣（城は黄河に面す、山東省東臨道茌平縣、現・聊城市茌平区）に軍す。癸未

(15日)、兗州刺史の**徐琰**は尹卯(山東省済南道東阿県、現・聊城市東阿県)を棄てて南に走り、是に於いて泰山、高平、金郷等の郡は皆な魏に没す。**叔孫建**等は東に青州に入り、**司馬愛之**、**季之先**は衆を濟東(濟水の東は青州の界)に於いて集め、皆な魏に降る。

■戊子(20日)、**魏兵**は虎牢に逼り、青州(齊・済南・高密・樂安・平昌・北海・東萊・太原・長廣などの郡)刺史の東莞の**竺夔**は東陽城(山東省遼東道益都県、現・濰坊市青州市、モンゴル時代益都県)に鎮し、遣使して急を告げる。

■**〔檀道濟は征討諸軍事を監す〕**己丑(21日)、南兗州刺史の**檀道濟**に詔して征討諸軍事を監し、**王仲德**と共に之を救わしむ。廬陵王の**義真**(壽陽に屯す)、龍驤將軍の**沈叔狸**を遣わして三千人を將いて**劉粹**(懸瓠に屯す)に就き、宜しき量りて赴援せしむ。

西秦秦王の**熾磐**は秦州牧の**曇達**を征して左丞相、征東大將軍と為す。

營陽王・高祖武皇帝・景平元年(癸亥、423年)

(營陽王の字は義符、小字は車兵、武帝の長子)

■**春、正月**、己亥(1日)朔、大赦し、改元す。

■辛丑(3日)、帝は南郊に禮(統は祀)す。

●魏の**於栗磾**は金墉を攻め、癸卯(5日)、河南太守の**王涓之**は城を棄てて走る。**魏主**は**栗磾**を以て豫州刺史と為し、洛陽に鎮せしむ。

●**魏主**は南(12月の重複の可能性)に垣岳を巡し、丙辰(18日)、鄴に至る。

■**〔蔡廓の就任拒否の理由〕**己未(21日)、詔して豫章太守の**蔡廓**を征して吏部尚書(晉以来大尚書という。諸曹の上に権任要重なり)と為す。**廓**は**傅亮**に謂って曰く、

「選事は若し悉く以て付を見れば、論ぜず。然らざれば、能く拜せず也。」(全権委任でないと嫌だの意)

亮は以て**録尚書**(統は録事尚書の誤りとす)の**徐羨之**に語り、**羨之**は曰く、

「黄、散(黄門侍郎め散騎常侍)以下は悉く以て**蔡**に委ね、吾は徒らに復た懷を措まず。此れより以上は、故に宜しく共に同異を參ずべし。」

廓は曰く、

「我は**徐干木**の為に紙尾に署す能わず！」(最後に署名するだけでは嫌だ)

遂に拜せず。干木は、**羨之**の小字也。選案(選曹の文案)の黄紙には、録尚書と吏部尚書とは名を連ね、故に**廓**の教訓は云う然り。(7-190p)

★**沈約**は論じて曰く、**蔡廓**は固く銓衡を辭し、志を屈すると恥と為す。豈に選(吏部の担当)と、録(録尚書は諸曹尚書の事を兼ね録す)とは同體にして、義、偏斷(吏部と録尚書が合議せず一方で斷ずる)無きを知らざる乎！良(まこと)に主の暗く時難きを以て、通塞(選考、賢路が通じるか塞がるか)之任に居すを欲せず。遠き矣哉！

【北魏南下阻止に、檀道濟の活躍】

■庚申(22日)、**檀道濟**は彭城に軍す。

●**〔竺夔は東陽城を保つ〕**魏の**叔孫建**は臨淄(りんし)に入り、向う所の城邑は皆な潰ゆ。**竺夔**は民を聚めて東陽城を保ち、其の城に入らざる者は、各々山險に依據し、禾稼(かか)を芟夷(せんい) (草を刈る)せしむ。魏軍は至り、食を得る所無し。済南太守の**垣苗**は(歴城を棄てて)衆を帥いて**夔**に依る。

●刁雍は魏主に鄴にて見みえ、魏主は曰く、

「叔孫建等は青州に入り、民は皆な藏し避け、城を攻めても下らず。彼（雍は先に兵を河済の間に集める）は素より卿の威信に服し、今卿を遣わして之を助けしめん。」

乃ち雍を以て青州刺史と為し、雍に騎を給し、行々兵を募りて以て青州を取ら使む。魏兵は河を濟りて青州に向かう者は凡そ六萬騎、刁雍は兵を募って五千人を得、士民を撫慰し、皆な租を送りて軍に供す。

●柔然は魏邊を寇す。二月，戊辰（1日），魏は長城を築き、赤城（直隸省口北道赤城県、現・張家口市赤城県）より西に五原に至る、延表（長さ）二千餘里、戍卒を備え置き、以て柔然に備える。

■丁丑（10日），太皇太后の蕭氏は歿す。

■北涼〔河西王・吐谷渾王の入貢〕河西王の蒙遜及び吐谷渾王の阿柴は皆な遣使して入貢す。庚辰（13日），詔して蒙遜を以て都督涼、秦、河、沙四州諸軍事、驃騎大將軍、涼州牧、河西王と為す；阿柴を以て督塞表（塞外沙漠の地、吐谷渾の地）諸軍事、安西將軍、沙州刺史、澆河公と為す。

■三月，壬子（15日），孝懿皇后（蕭氏）を興寧陵（江蘇省金陵道丹徒県、現・鎮江市丹徒区）に葬す。

●〔虎牢の籠城戦の坑道作戦、許昌進攻〕魏の奚斤、公孫表等は共に虎牢（現・河南省鄭州市の滎陽市汜水鎮、汜水関・成皋関・施門関など軍事上の要衝）を攻め、魏主は鄴（現・河北省邯鄲市臨漳県）より兵を遣わして之を助ける。毛德祖は城内の地に穴ほりて入ること七丈、分けて六道と為し、魏の圍みの外に出る。敢死（決死）之士四百人を募り、參軍の范道基等をして之を帥いせ使め、穴中より出で、其の後を掩襲す。魏軍は驚き憂れ、斬首は數百級、其の攻具を焚き而して還る。魏兵は退散すと雖も、隨いて復た更に合し、之を攻めるに益々急なり。奚斤は虎牢より歩騎三千を將いて、潁川太守の李元德等を許昌に攻め、李元德等は敗走す（續にて補充）。魏は潁川人の庚龍を以て潁川太守と為し、許昌に戍せしむ。

■〔虎牢の毛德祖の奮戦続く〕毛德祖は出兵して公孫表と大いに戦い、朝より晡に至り、魏兵を殺すは數百。會々奚斤は許昌より還り、德祖を合撃し、大いに之を破り、甲士一千餘人を亡いて、復た城に嬰りて自ら守る。

●魏主は又た萬餘人を遣わして白沙（直隸省大名道清豐県、現・濮陽市清豐県）に従いて河（当時の黄河は今より北）を渡り、濮陽（直隸省大名道濮陽県、現・濮陽市濮陽県）の南に屯す。

■朝議は以て項城（河南省開封道項城県、現・周口市項城市）は魏を去るに遠からず、輕軍して抗する所に非らず、（7-191p）劉粹をして高道瑾を召して壽陽（安徽省淮泗道壽県、現・淮南市寿県）に還らしめ、「若し沈叔狸が已に進めば、亦た宜しく且つ追うべし。」

とす。粹は奏す、

「虜は虎牢を攻めて、未だ復た南に向わず、若し遽に軍を揃めて項城を捨てれば、則ち淮西の諸郡は憑依する所無し。沈叔狸は已に肥口（淝水の淮水に入る口、安徽省淮泗道壽県、現・淮南市寿県）に頓し、又た遽に退くは宜しからず。」

時に李元德は散卒二百を帥いて項に至り、劉粹は（元德をして）高道瑾を助けて戍守せ使め、其の奔敗之罪を宥されんを請い、朝議は並びて之を許す。

●〔魏主は枋頭に至る〕乙巳（8日），魏主は韓陵山（魏郡鄴県にあり、河南省河北道安陽県の東北、現・安陽市安陽県）に旼し、遂に汲郡に如き、枋頭（桓温の北伐が枋頭の戦いで潰える、河南省河北道浚県・鋭濬県、現・安陽市鶴壁市浚県）に至る。

●〔公孫表の誅殺〕初め、毛德祖は北（元滎陽の人、武帝が關中洛陽を取らざる時に北より歸す）に在り、公孫表と舊有り。表は權略有り、德祖は之を患い、乃ち與に音問を交通す。密かに人を遣わして奚斤を説き雲わしめ、

「表と之とは謀を連ね、表は書に答える毎に、治定する所多し」

表は書を以て斤に示し、斤は之を疑い、以て魏主に告げる。是より先、表と太史令の王亮^{わか}は少きとき營署を同じくし、好みて亮を輕侮す。亮は奏す

「表は虎牢の東に軍を置き、地を便ずを得ず、故に賊をして時に滅びさら令むる。」

魏主は素より術數を好み、以て然りと為し、前後の仇（続は忿）を積み、人をして夜帳中に就いて之を縊り殺さしむ。

●乙卯（18日）、魏主は自ら靈昌津（古の延津、河南省河北道濬県の渡津、現・河南省鶴壁市、黄河故道の北岸、黎陽、官渡の戦い）を濟り、遂に東郡、陳留に如く。

■〔東陽城の籠城戦と檀道濟の救援〕叔孫建は三萬騎を將して東陽城（〔晉書地理志〕慕容超が劉裕に滅ぼされ長史の羊穆之は青州刺史に留まり。東陽城を築く。）に逼り、城中の文武は才^{わずか}に一千五百人、竺夔、垣苗は力を悉くして固く守り、時に奇兵を出して魏を撃ち、之を破る。魏の歩騎は城を繞（巡）り陳を列すること十餘里、大いに攻具を治める。夔は四重の塹（濠）を作り、魏人は其の三重を填づめ、檀車（城門を撞く車）^{とうしや}を為りて以て城を攻め、夔は人を遣わして地道より中に出で使め、大麻絙（大策）^{たいさく}を以て之を挽き折ら令む。魏人は復た長い圍みを作り、進み攻めること逾々急なり。時歴るに浸く久しく、城は墮壞（墮落し壊れる）^{おちかい}に轉じ、戦士は多く死傷し、餘の衆は困乏し、旦暮且に陷ちんとす。檀道濟は彭城に至り、以うに司、青の二州は並びて急なり、而るに所領の兵は少なく、分けて赴くに足りず。青州は道は近く、竺夔の兵は弱く、乃ち王仲德と兼行して先ず之を救うべしと。

■甲子（27日）、劉粹は李元德を遣わして許昌を襲い、庾龍を斬る。元德は因りて留まりて綏撫をし、並びに租糧^{たてま}を上つる。

●〔魏は浮橋を造り渡河、魏勢は湖陸を攻める〕魏主は盟津に至る。（続は于）栗磾は浮橋を治阪津（洛陽の西北四十二里）に造る。乙丑（28日）、魏主は兵を引いて北に濟り、西に河内に如く。娥清、周幾、閭大肥は地を徇えて湖陸に至り、高平の民は聚まり屯して而して之を射る。清等は盡く高平の諸縣を攻め破り、數千家を滅し、萬餘口を虜掠する。兗州刺史の鄭順之は湖陸に戍し、兵の少きを以て敢えて出でず。

●魏主は又た并州刺史の伊樓拔を遣わして奚斤を助けて虎牢を攻めしむ。毛德祖は方に隨いて抗拒し、頗る魏兵を殺し、而れども將士は稍々零落す。

●〔魏主自ら虎牢の水を断つも落とせず〕夏，四月，丁卯（1日）、魏主は成皋に如き、虎牢の河の（水を）汲む之路を絶つ。停めること三日、自ら衆を督して城を攻め、竟に下す能わず、遂に洛陽に如き《石經》（後漢の蔡邕の書す所 57 卷）を觀る。（7-192p）遣使して嵩高を祀る。

■●〔叔孫建は撤退、檀道濟は食尽き追えず〕叔孫建は東陽を攻め、其の北城三十許歩を墮^{おと}す。刁雍は速かに入るを請い、建は許さず、遂に克たず。檀道濟等の將に至らんとするを聞き、雍は又た建に謂って曰く、

「賊は官軍の突騎を畏れ、鎖を以て車を連ねて函陳（方形の陳）と為す。大岷已南は、處處に狹隘^{ぎやうあい}にして、車は方軌を得ず。雍は請う募る所の兵五千を將いて險に據りて以て之を邀えん、之を破るは必ず矣。」

時に天は暑く、魏軍に多く疫あり。建は曰く、

「兵人の疫病は過半、若し相い持ちて休まざれば、兵は自ら死して盡きん、何の須らく復た戦わん！今軍を全くして而して返すは、計之上也。」

己巳（3日）、道濟は臨朐（山東省膠東道臨朐県現・濰坊市臨朐県、漢代に建置された五大鎮山の一つ沂山あり）に軍す。壬申（6日）建等は營及び器械を燒きて而して遁げ、道濟は東陽に至り、糧は盡き、追う能わず。竺夔は東

陽城は壊れ、守る可からずを以て、移りて不其城（山東省濰東道即墨県の西南、現・青島市即墨区）に鎮す。

■●[刁雍は尹卯を保つ] 叔孫建は東陽より滑台に趣き、道濟は王仲德を分けて遣わして尹卯に向かう。道濟は軍を湖陸に停め、仲德は未だ尹卯に至らず、魏兵の已に遠きを聞き、還りて道濟に就く。●刁雍は遂に留まりて尹卯に鎮して、譙、梁、彭、沛の民五千餘家を招集して、二十七營を置き以て之を領す。

■[諸蠻の広範な動き、魏に朝貢] 蠻王の梅安は渠帥數十人を帥いて魏に入貢す。初め、諸蠻は本々江、淮之間に居し、其の後種落は蔓滋く、數州に佈し、東は壽春に連なり、西は巴、蜀に通じ、北は汝、潁に接し、往往にして之有り。魏の世に在り甚だ患いと為さず。晉に及び、稍々益々繁昌し、漸く寇暴を為す。劉、石が中原を亂すに及び、諸蠻は忌憚する所無く、漸く復た北に徙り、伊闕（洛陽防備の八關の一つ）以南、山谷に満ちる矣。

西涼 柔然 [唐契は柔然の伊吾王となる] 河西の世子の政德は晉昌を攻め、之に克つ。唐契（武帝の永初二年に叛く）及び弟の和、甥の李寶は同じく伊吾（新疆ウイグル自治区クムル市伊吾県・伊吾鎮、ハミ）に奔り、遺民を招集し、歸附する者は二千餘家に至り、柔然の臣となる。柔然は契を以て伊吾王と為す。

西秦 秦王の熾磐は其の群臣に謂って曰く、

「今宋は江南を奄有し、夏人は關中に雄據すると雖も、皆な與にするに足らざる也。獨り魏主は奕世（代々）英武にして、賢く能く用を為し、且つ識して云う『代之北を恆するは當に真人有り』、吾は將に國を擧げて而して之に事えんとす。」

乃ち尚書郎の渽（続は莫）者の阿胡等を遣わして入りて魏に見え、黄金二百斤を貢ぎ、並びて夏を伐つ方略を陳ず。

●閏月（五月、元嘉曆）、丁未（10日）、魏主は河内に如き、太行に登り、高都（山西省冀寧道鳳臺県、現・山西省晋城市）に至る。

■[虎牢の毛德祖の奮戦と陥落] 叔孫建は滑台より西に奚斤に就き、共に虎牢に入（続は攻）る。虎牢は圍ま被ること二百日、戦わざる日無く、勁兵は戦死して殆ど盡き、而して魏は増兵すること轉多し。魏人は其の外城を毀し、毛德祖は其の内に於いて更に三重の城を築きて以て之を拒み、魏人は又た其の二重を毀す。德祖は唯だ一城を保ち、晝夜相い拒み、將士の眼は皆な創を生じる。德祖は之を撫でて恩を以てし、終に離心無し。時に檀道濟は湖陸に軍し、劉粹は項城に軍し、沈叔狸は高橋に軍し、皆な魏兵の強きを畏れ、敢えて進まず。丁巳（21日）、魏人は地道を作り以て虎牢の城中の井を洩らし、井の深さは四十丈、山勢は峻峭、防ぐを得る可からず。城中の人馬は渴え乏しく、被創者は復た出血せず、重ねて饑疫を以てし、魏は仍って急に之を攻め、己未（23日）、城は陥ちる。（7-193p）將士は德祖を扶けて出で走らんと欲し。德祖は曰く、

「我は此の城と俱に斃れんと誓い、義として城は亡び而して身は存ぜ使めざる也！」

魏主は將士に命ず、

「德祖を得る者は、必ず之を生かして致せ。」

將軍の代人の豆代田は德祖を執りて以て獻ず。將佐の城中に在る者は、皆な魏の虜する所と為り、唯だ參軍の范道基は二百人を將して圍いを突し南に還る。魏の士卒の疫死に座す者亦た什に二三なり。

●[北魏は占領地の司、兗、豫の支配体制を作る] 奚斤等は悉く司、兗、豫の諸郡縣を定め、守宰を置き以て之を撫でる。魏主は周幾に銘じて河南に鎮ぜしめ、河南人は之を安ず。（続の、この部分を次につなげているのは誤り）

■徐羨之、傅亮、謝晦は境土を亡失すを以て、上表して自ら（彈）劾す。詔して問う勿からしむ。

■〔謝晦誅殺の謀を傅亮は拒否〕徐羨之の兄の子の吳郡太守の珣之は頗る政事に豫り、侍中の王韶之、程道惠、中書舍人の邢安泰、潘盛と結びて黨友と為る。時に謝晦は久しく病し、客を見るに堪えず、珣之等は其の詐り疾みて、異圖有るを疑い、乃ち羨之の意と稱して以て傅亮に告げ、亮をしての詔を作ら令めて之を誅せんと欲す。亮は曰く、

「我等三人は同じく顧命を受け、豈に自ら相い誅戮する可けんや！諸君は果たして此の事を行えば、亮は當に角巾して歩いて掖門（宮門の正南門）を出るべき耳。」

珣之等は乃ち止める。

●五月（六月、元嘉曆）、魏主は平城に還る。

●六月（七月、元嘉曆）、己亥（4日）、魏の宜都の文成王の穆觀は卒す。

●丙辰（21日）、魏主は北巡し、參合陂（燕との戦地）に至る。

■秋、七月（八月、元嘉曆）、癸酉（9日）、帝母の張夫人を尊して皇太后と為す。

●魏主は三會（山西省雁門道忻県、現・山西省忻州市西北）の屋侯泉に如く。八月（九月、元嘉曆）、辛丑（7日）、馬邑に如き、灇源を觀る。

西秦 柔然 〔蒙遜は世子の政徳を柔然に殺される〕 柔然は河西を寇し、河西王の蒙遜は世子の政徳に命じて之を撃たしむ。政徳は輕騎にて進みて戦い、柔然の殺す所と為り、蒙遜は次子の興を立てて世子と為す。

●九月（九月閏月、元嘉曆）、乙亥（11日）、魏主は宮に還り、奚斤を召して平城に還らしめ、兵を留めて虎牢（河南省 鄭州市 滎陽市汜水鎮の西南部に置かれた関所）を守らしむ。娥清、周幾を使わして枋頭に鎮ぜしむ。司馬楚之を以て將いる所の戸口を汝南、南陽、南頓、新蔡の四郡（晉の武帝が汝陰を分けて新蔡郡を立て、汝南を分けて南頓郡を立てる。魏はまだこの四郡を領さず、備置するのみ）に置き、以て豫州を益す。

●冬、十月、癸卯（10日）、魏人は西宮（拓跋珪が天賜元年に築く平城の西宮）の外垣を広げる、週（続は周）は二十里。

西秦 〔秦王の熾磐之皇后と虎台の陰謀〕 禿髮辱檀之死（116 卷晉の安帝義熙十年）する也、河西王の蒙遜は人を遣わして其の故の太子の虎台を誘い、番禾、西安の二郡を以て之に處するを許し、且つ之に兵を借し、秦を伐たしめ、其の父の仇に報い、復た故地を取らしむ。虎台は陰に之を許し、事は洩れ而して止む。秦王の熾磐之后は、虎台之妹也、熾磐は之を待つこと初めの如し。后は密かに虎台と謀って曰く、

「秦は本々我之仇讎なり、婚姻を以て之を待つと雖も、蓋し時宜耳。先王之薨ずるは、又た天命に非らず。遺令（鳩を被りて解かざるをいう、116 卷晉の安帝義熙十年）して治せざらしむる者は、（7-194p）子孫を全濟せんと欲す故也。人の子為る者は、豈に臣妾の仇讎となり而して報復を思わざる可けん乎！」

乃ち武衛將軍の越質洛城と熾磐を弑さんと謀る。后の妹は熾磐の左夫人為り、寵有り、其の謀を知り而して之を告げ、熾磐は后及び虎台等十餘人を殺す。

●〔魏は許昌、汝陽を占領〕十一月、魏の周幾は許昌を寇し、許昌は潰え、潁川太守の李元徳は項に奔る。戊辰（5日）、魏人は汝陽を圍み、汝陽太守の王公度は亦た項に奔る。劉粹は其の將の姚聳夫等を遣わして兵を將いて助けて項城を守らしむ。魏人は許昌城を夷げ、鐘城（泰山の界、山東省東臨道禹城県の東南、現・徳州市禹城市、兗州の界を立てる）を毀し、以て封疆（国境）を立てて而して還る。

【拓跋嗣は殂して拓跋燾立つ、崔浩と寇謙之の登場】

● 【魏の太宗明元帝・拓跋嗣は殂す】 己巳（6日）、魏の太宗（年32、392-423）は殂す。壬申（9日）、世祖（諱は燾、字は佛理）は即位し、大赦す。十二月，庚子（8日）、魏は明元帝を（雲中の）金陵に葬す。廟號は太宗とす。

● 魏主は其の母の杜貴嬪を追尊して密（諱）皇后と為す。司徒の長孫嵩より以下普ねく爵位を増す。襄城公の盧魯元を以て中書監と為し、會稽公の劉を尚書令と為し、司衛監の尉眷、散騎侍郎の劉庫仁等八人は分けて四部（東西南北）を典ず。眷は、古真之弟子也。

● 【長寿の羅結と崔浩の才能】 河内の鎮將の代人の羅結を以て侍中、外都大官（内部大官もある）と為し、三十六曹事を總ぜしむ。結は時に年一百七、精爽衰えず、魏主は其の忠愨（忠実で誠あり）を以て、親しく之を任じ、長秋卿を兼ね、後宮を監典し、臥内に出入せ使む。年一百一十にして、乃ち歸老を聽し、朝廷は大事有る毎に、騎を遣わして訪ねる焉。又た十年乃ち卒す。左光祿大夫の崔浩は經術を研精し、制度を練習し、凡そ朝廷の禮儀、軍國の書詔の、關掌せざる無し。浩は老、莊之書を好まず、曰く、

「此れは矯（聖賢に託して自説を神にする）誣（聖賢にこの事無きに寓言して詆を加える）之説にして、人情に近からず。老聃（老子の諡）は禮を習い、仲尼（春秋時代の思想家）の師いる所、豈に敢えて法を敗る之書を為りて以て先王之治を亂さん乎！」

尤も佛法を信ぜず、曰く、

「何為れぞ此く胡神に事えんや！」

世祖の即位に及び、左右は多く之を毀る。帝は已むを得ず、浩に命じて公を以て第に歸らしむ。然れど素より其の賢を知り、疑議有る毎に、輒ち召して之を問う。浩は纖妍（纖細優美）潔白にして美婦人の如く、常に自ら謂う、

「才は張良に比び、而して稽古（古の学芸を学習研究）は之を過ぎたり。」

既に第に歸り、因りて服食養性之術を修める。

● 【寇謙之の道教振興】 初め、嵩山の道士の寇謙之は、贊（統は讃）之弟也、張道陵（後漢の五斗米道の天師、張魯の祖父、道教）之術を修めり、自ら言う、嘗て老子の降るに遇い、謙之に道陵を繼いで天師と為らしめるを命じ、辟谷輕身之術及び《科戒》二十卷（今の道家の科戒はここに始まる）を以て授け、之をして道教を清整せ使む。又た神人の李譜文に遇う、雲はく老子之玄孫也、《圖菴真經》六十餘卷を以て授け、(7-195p)之をして北方の太平真君を輔佐せ使む；天宮靜輪之法を出し、其の中の數篇は、李君之手筆也。謙之は其の書を奉じて魏主に獻ず。朝野は多く未だ之を信ぜず、崔浩は獨り之に師事し、従いて其の術を受け、且つ上書して其の事を贊明して曰く、

「臣は聞く聖王の命を受けるや、必ず天の應じる有りと。《河圖》、《洛書》（黄河は圖を出し、伏羲象どりて以て八卦を畫す。洛水は書を出して、禹これを得、以て九疇を叙す。上古の伝説なり）は皆な蟲獸之文に言を寄せ、未だ今日が人神が接對し、手書して粲然たるが若くならず、辭旨は深妙なること、古より比べる無し。豈に世俗の常に慮すを以て而して上靈之命を忽がせにする可けんや！臣は竊かに之を懼れる。」

帝は欣然とし、謁者をして玉帛、牲牢を奉じて嵩岳を祭り、謙之の弟子の山中に在る者を迎え致ら使め、以て天師を崇び奉じ、新法を顯揚し、天下に宣佈（統は布）す。天師の道場を平城之東南に起こし、重壇は五層、道士百二十人に衣食を給し、毎月廚を設けて會するは數千人。

●臣光は曰く、老、莊之書は、大きくは指すに死生を同じくし、去就を輕んじんと欲す。而るに神仙を為す者は、餌を服し修煉して以て輕舉をせんを求め、草石は煉じて金銀と為り、其の術為るは正に相い戻す矣。是れを以て劉歆の《七略》には道家を叙して諸子と為し、神仙を方技と為す。其の後復た符水、禁咒（呪う、まじない）之術（張道陵の術）有り、謙之に至り遂に合わせて而して一と為す。今に至るまで之に循^{したが}い、其の訛^{あやま}りは甚しきや矣！崔浩は佛、老之書を喜ばず而して謙之之言を信じるは、其の故は何にある哉！昔は臧文仲は爰居（海鳥の名前、転居。風を避けて魯の東門の外に止り、臧文仲は国人をして祀らせる。孔子は之を不知と批判）を祀り、孔子は以て智らずと為す。謙之の如き者は、其の爰居^な為ること亦た大なるか矣。
「《詩》三百，一言以て之を蔽えば，曰く思ひは邪無し。」
君子之術を擇ぶに於ける，慎しまざる可けん哉。

令和 2 年 3 月 12 日	翻訳開始	10522 文字
令和 2 年 8 月 23 日	完訳終了	21062 文字
令和 3 年 6 月 28 日	書き下し	22389 文字